

福井大学教職大学院に期待すること

福井県教育委員会教育長 広部正紘

この4月に、福井大学教職大学院が2年目を迎えました。福井県教育委員会が推薦した24人の現職教員も第2期生として、より高度な専門知識や技能の習得に意欲的に取り組んでいます。

現在、学校現場に求められることは多岐にわたっています。今年から小学校でも外国語学習が始まりましたが、その一方で、子どもの理数離れを解消することも重要です。また、発達障害などに対する特別な支援や、不登校やいじめなどへの適切な対応も大きな課題です。

このような中で、教職大学院に期待することは、質の高い新人教員を養成することはもちろんですが、小中高の生徒指導や授業づくりでリーダーとなる教員を育成することがなにより重要だと思います。ここで学んだ中堅教員のみなさんには、在籍校だけでなく、周りの学校をも含めて地域の教員たちの核となって、互いに切磋琢磨し合う形を作っていただきたいと思います。

本県は、子どもたちの学力が全国最上位であります。一方で、学校以外での学習教材費や塾、家庭教師など補習教育費用への家計からの支出が少ない県でもあります。これは、本県の学校教育がいかに充実しているかを示すものでもあります。

そして、ここには、今日まで脈々と受け継がれてきた独自の取り組みがあります。例えば、昭和26年から独自の学力調査を実施し、その結果を授業の改善に活かしてき

ました。また、地方財政の厳しい中であっても、全国に先駆けて学級編成基準の引き下げを行っています。これら創意工夫の数々が、本県の高い教育力を支えています。

福井大学教職大学院でも、教授陣が院生である教員の勤務校に出向いて実践研究を行うことや、1年間で修了できるよう単位取得の負担軽減などの工夫を凝らしていますが、これらは、本県の教育力をさらに発展させると同時に、わが国の教員教育のモデルとなるものと考えます。

教育の目標は、わが国の将来を託す子どもたちを、社会の中で活躍できるような人へと育てることにあります。そしてこれは、学校教育を支える教員のみなさんの双肩に負うところが大きいと思っています。

県でも、本県の子どもたちが社会に出た後に振り返って、「福井県で学ぶことができてよかった」と思ってもらえるように、充実した教育を提供するため日々努めていきます。

これからも、福井大学教職大学院との連携を強めて、全国から高い評価を受けている「福井の教育」をさらに充実したものにしていきたいと思っています。

内容

- (1) 福井大学教職大学院に期待すること
- (2) 2009年夏のラウンドテーブルを企画して
- (3) 院生の自己紹介

2009年夏のラウンドテーブルを企画して

福井大学教職大学院 森 透

石井パークマン 麻子

福井大学教職大学院では毎年、「ラウンドテーブル」という、さまざまな教育の現場を主とした実践報告を語り、聴き、考え合うフォーラムを開催しています。6月27(土)、28日(日)に行う今回のラウンドテーブルには、2つの特色があります。

第1は従来とは異なり、1日目を専門分野毎の構成にしたことであり、第2は本学教職大学院・教職専門性開発コースの若い院生たちがプロセスの始めから企画に参加し、独自のプログラムを展開することです。企画および準備会議を、5月中旬から6月25日までの間に計8回(第1回は教員のみ)行いました。本学の教員や院生のみならず、他大学の教職大学院関係者や福井県内外の関心ある方々、行政や現職教師および専門職の方々、大学院在籍生や修了生、学部在籍生および卒業生等が集まります。

1日目のテーマは、「専門職としての実践的力量形成のプ

ロセスを語り合うー学校教育、福祉・特別支援教育、医療・看護の領域を中心にー」とし、①学校における協働研究／教師の実践を支える教職大学院のあり方、②コミュニティの学習を支援する専門職 ③特別なニーズのある人を支える学校と地域、専門職間の連携 ④医療・看護の専門職における実践力形成 ⑤教師を目指す若い世代で語る(院生企画)の5領域に分かれて実践報告を聴き、討議を行います。2日目は、教職大学院の在籍生たちの報告を主に、専門分野を越えたグループ構成で討議を行います。

この2日間を、ぜひとも爽りの多い実践交流と創造的な話し合いの場にしたいものです。皆様の積極的な参加をお待ちしています。

院生企画を行って

福井大学教職大学院教職専門性開発コース2年 黒川 清貴

今回のラウンドテーブルでは、初めて私たち教職開発専攻2年の院生(以降M2)が中心となって、企画を行いました。テーマは、「若い世代と語る～走り出した実践をもとにした語り合いから学ぶ～」で、他大学の教職大学院生や教職を志す学部生・院生、講師の方と、今積んでいるお互いの実践・経験を語り合うセッションを設けることにしました。

これまでのラウンドテーブルでは、様々な領域・職種・立場・年代の方々と、異なる職種の実践や取り組みを語り合ってきました。そこでは、自分の実践に対して、豊富な経験に基づいた様々な視点からのアドバイスや意見をいただくことができました。そのアドバイスや意見をもとに、自分の実践を省察することで、新たな課題を発見することができ、自分自身も成長することができました。また、現職の先生方が実際に行なっている、教育改革への先進的な取り組みの話は、私たちにとっても大変刺激的で興味深いものであり、教職への思いや憧れを強くするものでした。

境遇や立場の違いから、様々なことを感じ、学んできた一方で、私たちと同じ立場にいる他大学の教職大学院生がどのように学んでいるのか、教師を目指している同世代が、日々どのような実践や研究を行い、それについてどう考えているのかを知りたいと感じるようになりました。立場が似ているからこそ、お互いの実践を共有することで、抱える悩みや喜びが共感できるのではないかと考えたからです。そこで、今回のラウンドテーブルでは、テーブルを囲む対象を「教師を目指す若い世代」に狭め、同世代同士の語り合いを行うセッションを設けようと考えました。

企画会議では、最初に今回の企画の目的とテーマを考えました。目的とテーマを決めることで、どんな語り合いにしたいのか、具体的にどのような方に声を掛けるのかなどが明確になると考えたからです。目的は、①教員を目指している若い世代同士で、今積んでいる実践・経験を語り、聴き合うことで、改めて自分の教育観を捉えることと、②語り合いの中から生まれる学びを共有し、多角的な視点か

ら自分の考えを広げることの2つに決まりました。目的とテーマを考える中で、M2の各個人が持っているこのセッションに対するビジョンが、統一されていったように思います。その後、係に分かれてそれぞれに分担された仕事をし、週に一度、進捗状況を共有するという流れで企画を進めていきました。

今回初めてM2で企画を行ってみて、今後にいける一つ

のいい経験になったように思います。私たち自身、やりたいと感じていたことができる嬉しさと、企画が成功してほしいという願いもあり、これまで以上にこのラウンドテーブルが楽しみです。院生企画を行うにあたり、このセッションに参加して下さるすべての方が、来てよかった、楽しかったと感じてくれるような時間になれば幸いです。

福井大学教職大学院教職専門性開発コース2年 青柳 宏治

私は今回、ラウンドテーブルに企画の段階から参加させていただきましました。今までのラウンドテーブルを振り返ってみると、私自身は、「自分は何を学びたいのか」「自分は何を求めているのか」という自分自身の「問い」を持つことを大事にしてラウンドテーブルに参加していたように思います。しかし、今回「つくる」側として参加してみて、自分自身の学びだけでなく、「参加者全員にとって有意義な学びの場とするためにはどんな内容で、どんな構成にすればいいのか」という、より広い視点でラウンドテ

ブルを考えることができました。また、そのような広い視点でラウンドテーブルを見ることによって、参加者同士の学びを深める「学び合うコミュニティ」の重要性や、互いの学びのために「実践を語り合う」ことの必要性も、より強く実感できたように思います。このことは、私自身が今後、現場で実践を重ね、高めていく上でも非常に重要な視点であると思います。その意味で今回ラウンドテーブルに企画から参加させていただき、非常に良い経験をさせていただいたと感じています。

福井大学教職大学院教職専門性開発コース1年 北島 亜実

今回のラウンド・テーブルに向けて私たち教職専門性開発コースの院生は、約1ヶ月前から話し合いをしてきました。

私が去年6月にラウンド・テーブルに参加したときは、招かれる立場だったのに対して、今回は、招く立場だということを考えるととても不思議な気持ちでした。先輩方は、何回もラウンド・テーブルを経験しているのに対して、私たち1年生は何もわからない状態なので少し不安がありました。しかし、4回もの会議の中で「自分たちには何が

できるか」を知ることができたり、先輩方、事務の方や先生方の「ラウンド・テーブルを絶対に成功させたい思い」を感じることができました。会議の中では、大きなことだけではなく、小さいことまで話し合いをしました。看板の位置、受付の振り分けをどうしたらいいか、などラウンド・テーブルを成功させるために色々なことに注意を向けることが大事だ、と思いました。次の機会には、1つでも手伝えることが増えればよいと思います。

「適応的熟達化」につながる学びの経験

若い院生たちと「ラウンドテーブル」の企画を進めながら、私はずっと教師の専門性における熟達化について考えていた。近年、教師の熟達化研究において「適応的熟達化」(e.g., Alexander, 2003)という概念が注目されている。これは決まった手順や型に従って「効率的」に業務を遂行できる力と、逆に手順や型にとらわれず、柔軟に状況に応じながら「革新的」に行うことができる力を同時に発展させてい

福井大学教職大学院 北田 佳子

く熟達化を意味する。専門家としての教師の成長はこの「適応的熟達化」の道をたどるべきであり、これからの教師教育はこの熟達化を促すよう、「効率性」と「革新性」が同時に必要とされるような学びの機会を保障しなければならないと考えられている。

今回、「ラウンドテーブル」の企画・運営に携わることで、院生たちは「適応的熟達化」の道につながる次のよ

うな学びを経験したのではないだろうか。まずこのような会を企画・運営するためには、ある程度定型化した業務を「効率的」に遂行しなければならない。しかし院生たちは、指示された手順を効率良く行うだけでなく、時にはこれまでのやり方を問い直すような「革新的」な提案もしながら話し合いに参加していた。また「若手院生の集い」という新しい企画では、院生たちは「革新的」な意見を積極的に出し合いながらも、それを具現化するために、ある程度決まった手順に沿って「効率的」に業務を進めなければならないことも学んでいた。このように、彼らは今回の企画・運営を通して、「適応的熟達化」に必須の「効率性」と「革新性」が同時に求められるような学びを経験するこ

とができたのではないだろうか。

もし彼らが「ラウンドテーブル」の当日にのみ、一部の補助的作業を行うだけであったなら、決してこのような学びは生じなかっただろう。最初から企画に参画していたからこそ、「ラウンドテーブル」全体のヴィジョンとの関係の中で自分たちの作業を捉え、その一つひとつを吟味し、時には「効率性」を追求する作業を「革新的」に捉えなおし、また時には「革新的」な営みを「効率性」の視点から考察するといったことが可能であったと考える。このような学びの経験は、これから教師という専門職への第一歩を踏み出そうとしている彼らにとって大きな意味を持つものになるだろう。

Alexander P. (2003). "The Development of Expertise: The Journey from Acclimation to Proficiency." *Educational Researcher*, 32, pp.10-14.

院 生 紹 介

赤澤 達郎

あかざわ たつろう

(南越前町立南条小学校)

福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースに入学した赤澤達郎です。

福井大学の門をくぐったのはこれが2回目、1回目は共通一次試験の時でした。教職大学院のことは報道等を通じてその存在は知っていましたが、「自分とは無縁のこと」と思っていました。私は現任校において平成19年度から教務主任・研究主任という立場になりました。それ以来、自分の中で痛切に感じていたのが、自分の未熟さ、力のなさでした。教職に就いて20年以上経つにもかかわらず、先が見えず、毎日が手探り状態のような感じでした。そういう状況の中で、自分の心の中に芽生えたのが、「自分を変えたい」という思いでした。そういう思いで「教職大学院」の門をたたきました。

本校は、平成15・16年度に「学力向上フロンティア事業実践校」として、わかる授業づくりのために「自ら学び、考え、ともに高め合う子の育成」という研究主題のもと、「確かな学力」の育成に向けて取り組みました。また、平成18・19年度には「児童生徒の心に響く道徳教育推進事業」の指定を受け、研究主題を「豊かな心と実践力を育む道徳教育～道徳の時間における発問と展開の工夫～」と設定し、正しい規範意識を持ち、苦しくても最後まで諦めない精神力を身に付けられるよう、「豊かな心」と「実

践力」を持った子ども達の育成を目指してきました。未熟な自分がその一員として研究を進めて来られたのも他の先生方の助けがあったからだと思います。そして、

平成21・22年度には「外国語活動における教材の効果的な活用及び評価の在り方等に関する実践研究事業」の研究を進めることになりました。研究主任として、子どもたち一人ひとりの成長に向けて、教職員が一致団結し、「チーム南条」として前進できるよう働きかけていきたいと思っています。

さて、現任校以前に南条中学校・南条町教育委員会にそれぞれ4年間勤務していました。自分が生まれ育った南条の地で長きに渡り教育に携わることができていること、大変うれしく思っています。子ども時代だけでなく教職に就いてからもこの南条で育てられていることを考えると、なんとしてもこの南条に恩返しをしたいという思いでいっぱいです。そのためにもこの2年間精一杯がんばりたいと思いますので、よろしくお願ひします。



大崎 忠久 おおさき ただひさ

(福井県特別支援教育センター)

福井県特別支援教育センターの大崎忠久です。皆さんは当センターのことをご存じでしょうか。「運動公園の所にある・・・」と教育研究所とお間違えになる人が少なからずいらっしゃると思います。私もセンターに異動する前は初任者研修や経年研修でお世話になった程度で、ふだん意識することは殆どありませんでした。このような私も、センターで6度目の春を迎えることとなりました。専門は理科で、大学時代は顕微鏡で菌糸を観察する毎日でしたが、副免許で取った養学免許のお陰で(?)、卒業以来特別支援教育に携わっています。

センターでは、就学前の幼児への通所指導と丹南地区の小・中学校への教育相談、研修事業を担当しております。異動後の2年間は学校とは異なる業務に悪戦苦闘し、ただ与えられた仕事をこなし、早く学校現場に戻ることを考える日々でした。しかし、気がかりな子ども達への教育相談をとおして、先生方や保護者の悩みをお聞きする中で、「あのようなアドバイスで良かったのか?」「あの受け答えで、現場の先生方や保護者の方は気持ちが軽くなったのか」と自問する日々が変わってきました。センターでの生活に慣れ、自分の行動を振り返るゆとりが出てきたのは3年過ぎてからのことでした。

センター業務の中では、子ども達に対するかかわり方や支援について、私なりの考えをお伝えしていますが、実際



に子ども達に対峙するのは現場の先生方であり保護者の方です。教育関係者にとってのインセンティブは子ども達の笑顔だと思います。同様に、私達センター職員のインセンティブも子ども達の笑顔であり、加えて、現場の先生方や保護者の方の笑顔です。相談後のかかわりで子ども達が変わったことを嬉しそうに伝えてくださる先生方や保護者の方の笑顔から、子ども達の笑顔も見えるような気がします。

『子ども達とかかわる先生や保護者』を支えるセンターの役割は重要です。しかし、その内容や方法は、センターの業務や事業の中で時代のニーズに合わせて常に見直す必要があると感じています。教職大学院では、様々な校種の先生方との意見交換をとおして、センターの役割を考えていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

なお、当センターのWebサイトに是非お立ち寄りください。業務や研修講座の案内等、特別支援教育に関する情報を提供しております。

URL : www.fukuisec.jp

中野 吉人 なかの よしと

(福井市足羽小学校)

福井市足羽小学校の中野です。よろしくお祈りします。

4月に入学し、25、26日に初めての合同カンファレンスがありました。自分自身の教職人生を振り返る時間がありました。「え!もう23年も経ってしまったの」ということをしみじみ感じました。敦賀市の松原小学校が最初の赴任校でした。学校から海が見えるとても素敵な学校でした。「どんな子どもたちや先生方、保護者がいたらか?」と目を閉じて思い出そうとしますが、数人の顔だけしか浮かんできませんでした。押し入れに入っている段ボール箱をすぐにも探し出し、アルバムや思い出の品を見たいなと思いました。あることはあるが、どうなって



いるのだろうという不安にも駆られました。でも、大学院での振り返りでは時間も限られていたので、印象に残っている先生方や自分が関わった仕事や実践が中心となりました。それだけでも、たくさんの人との出会いが思い出されました。支えてくれた子どもたちとの学校生活の中で、ゆったりと感じ方や物の見方・考え方が変化してきたことを感じ取ることができました。いつもは気づかない、気かけないよ

うにしている顔や体型は、新任の頃とはずいぶん変わってきています。じっくりと自分の顔を鏡で眺めて見るように、立ち止まって振り返る間がなかなかありません。大学院での貴重な先生方との出会いや会話を大切に、いまここにいる自分と対話できることを楽しみたいと思います。

正月の頃、大学院入学のことが家族で話題になりました。中1になる娘が「大学院に何しに行くの？」と質問してきました。「決まってるやろ、勉強しに行くんや」とすぐに答えると、姉の方が「たくさんお金いるの？」と言ってき

ました。自分も高校入学を4月に控えているからだろうなと感じました。すかさず母親が、「学校では勉強できないの？お父さんはすぐに自分だけで決めてきてしまうんだから」と畳み掛けてきました。何かうまく答えることができなかつたので、「迷惑をおかけしますがよろしくお願いします。」と言ってその場を終わりました。大学院での学びを意義あるものにするため、目の前の子どもたちを大切に、彼彼女から謙虚に学ぶ姿勢を第一にしていきたいです。

安本 敏浩 やすもと としひろ

(福井市明新小学校)

4月から福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースに入学しました安本敏浩と申します。教師生活は今年度で24年目に突入しました。これまで多くの先生方や子どもたち、保護者の方々や地域の方々から数多くのことを学び今日に至っています。縁あって教職大学院に入学することになったわけですが、これを契機として多くの先生方をサポートできるような力を身に付けたいと願っています。最近私は、子どもたちが以前と比べて大きく変わってきたと感じています。例えば、短く簡単な内容であるにも関わらず、内容を聞き取ることができないという場面を多く見かけます。また、トラブルが起きた際に自分の非を素直に認めるという場面も少なくなりました。時には周りの子に責任を転嫁するような場面もよく見かけます。私たちは多くの人との関わりの中で生きているということ子どもたちに教えていくことが必要だと考えています。

ここ数年私は挨拶の大切さを強く意識するようになりました。特に、「ありがとう。」「ごめんなさい。」という言葉大切にしています。周りの人に感謝したり自分の行為を反省したりすることにより、子どもたちが周りの人を

意識しながら行動するようになってほしいと願っています。それが結果的に学習面や日常生活面など様々な面で良い影響をもたらすのではないかと考えています。

今年度、私は福井市明新小学校に赴任しました。校長先生をはじめ諸先生方のご理解もあり、「挨拶を始めとする様々なコミュニケーション活動を通じた温かい学校風土づくり」に関する研究を進めることになりました。現在は、毎朝玄関前で挨拶に積極的に取り組んだり、挨拶の意義を考える内容の道徳の授業を飛び入りで行ったり、少しずつですが研究を進めている現状です。今回の研究は、私がトップダウン方式で進めるのではなく、子どもたちや先生方の力を借りながら協働で進めていきたいと考えています。

今回の研究が同じような課題を抱えている学校に対し、何かの参考になればと願っています。



竹澤 康宏 たけざわ やすひろ

(県立福井東養護学校月見分校)

本年度、福井大学教育学研究科教職開発専攻スクールリーダー養成コースに入学しました竹澤康宏です。現在は、福井県立福井東養護学校月見分校に勤務しております。特別支援学校に勤務するようになりまして、本年で3年目で

す。私の教師としての経歴について、次に書きたいと思っています。



昭和61年3月に当時の福井大学教育学部を卒業しました。その後は、数学科の教員として、福井大学教育学部附属中学校に講師として2年、道守高等学校定時制に4年、金津高等学校に6年、高志高等学校に9年勤めさせていただき、現在に至ります。

この経歴を見ていただいても分かる通り、高等学校の数学の教員としての勤務が長く、相談部の経験もないまま、一昨年の4月に月見分校に赴任いたしました。そして、与えられた校務分掌が、教務部の支援係というものでした。教務の経験は、長い（都合10年）のですが、今ほども書きましたが、教育相談の経験が全くなかったため、支援係という仕事が、どういうものかもまるで分からないままスタートしました。まず初めの大きな仕事としては、福井市内の高等学校で、発達障害についての理解と啓発を行うガイダンスをすることでした。センター的機能を各特別支援

学校が担うということ、足羽高校を皮切りに福井市内6高等学校でガイダンスを行いました。何の経験もない私が、ガイダンスでお話しできたのも、同じ職場の先生方のアドバイ스가あったからこそだと思っています。このときに、あらためて一人ではどうにもならないことでも、チームとして対応すると、予想以上の力を出せることを痛感しました。教職大学院で、学校の組織や研究について協働で働く仕組みについてさらに学習し、児童生徒の指導により大きな力が発揮できるようにするためにはどうすべきかを学んでいきたいと考えております。

まだまだ、未熟ではありますが、皆さんとともに協働研究をし、職場でもその考え方を広めていきたいと考えています。一年間ではありますが、どうぞよろしくお願い致します。

政井 英昭 まさい ひであき

(福井大学教育地域科学部附属特別支援学校)

教員生活のスタートは美方養護学校でした。その後、美浜中学校、敦賀の葉原小学校、中郷小学校、そして、福井市内に転居していたことで現在の附属特別支援学校に赴任して、早6年目です。

小・中・特と校種を渡り歩いてきて、得をした部分が多いなあと感じています。その場その場で、自分のやりきれることをし、同僚との協働による仕事を楽しく進めてきたつもりです。また、いくつかの民間の教育サークルの集まりにも顔を出して、全国の教員とのネットワークも持ってきました。

附属に来て、そういった様々な経験をまた一回り大きくふくらませることが出来ているのが、有り難いことだと感じています。福井大学の実践センターへの投稿も何年か続けることも出来、また、個人研究が日本学術振興会の科研費(奨励研究)に採択され研究費をいただけ、自由な研究・実践を進めることができるのも附属ならではの強みです。自費ですがスウェーデンに出かけ特別支援教育や福祉の現場を視察(当時スウェーデンにまだいらした石井パークマン先生に案内してもらいました!)出来たのも、半月間も校費でアメリカの特別支援教育を視察させてもらったのも、附属ならではの強みです。

昨年からは研究主任をさせてもらい、「自分らしく生き

る学びの創造」というテーマの下、県からの指導助言者や大学の先生方、他の学校や施設職員、附属幼小中の先生方と、そして何より経験豊富な本校の先生方との協働を進めることができることに、緊張はしていますが大きな充実感を得ているところです。

力不足を感じるのは、研究面でのリーダーシップということもありますが、やはり子どもへのかかわりの面です。担当している「焼き物(陶芸)」は奥が深いし、好きな音楽の世界ではもっと豊かな表現を子ども達と一緒に身に付けたいし……。一人一人がもっと自分を作り、自分らしく生きていくことが出来るように、授業で何をどう取り上げ、どう進めていくとよいのか……。

そのためにも教職大学院では、先生方と一緒に子ども達との実践での接点をもっと深めていくことが出来たらと考えています。ちょうど今年度は「知的障害児の美術表現と生涯活動との接点」というテーマで科研費がもらえました。美術は好きですが、素人。学ぶことは多いです。でも、素人の発想が上手くいくこともあるかなと構想を膨らませているところです。どうぞ、よろしくお願い致します。



竹内 雅子 たけうち まさこ

(福井大学教育地域科学部附属中学校)

4月から教職大学院スクールリーダー養成コースに入学しました、竹内雅子です。現在福井大学教育地域科学部附属中学校で養護教諭をしています。

教職大学院に入学して約2ヶ月。合同カンファレンス等も月1回ですので、勤務しながらでも無理なく参加させてもらっています。その合同カンファレンスでは、毎回異なった教職大学院生のグループで、話し合い聞き合う事を行っています。第1回目は、今までの自分の職歴や経験等について話しました。最初は、「こんなことを話して何になるのだろう?」と思っていました。でも実際に参加してみると、他人に話すことで、今までの自分について振り返ることになり、改めて自分と向き合うことができたような気がします。それに他のスクールリーダーコースの先生の話聞きながら、いつの間にか自分と対比させていて、いろいろな気づきや自分を客観的に捉えることにつながりました。佐藤学氏は『教師花伝書』で「若い教師たちから、もっともっと学ぶ必要がある。」と述べていますが、私も若いストレートマスターの院生の話からは、新たな視点をもたらうことができました。

教職大学院への養護教諭の入学は私一人なので、より養護教諭の職を意識し、これまで自分が養護教諭として大事

にしてきたものについて考えるようになりました。

スクールリーダーとして、養護教諭の私が何を行っていけばよいのか

悩むところですが、附中でこれまで行ってきた「養護教諭が行う健康教育のカリキュラム研究」とつなげて、これから探っていきたいと考えています。また今までは職務を粛々と行うことにのみ、意識がむいていたのですが、これからは学校の中での立ち位置にも目をむけ学校に貢献できたらとも思っています。

教職大学院では、入試説明会や入学試験ですら、ただ形式的に行っているのではなく、一人一人の思考が深まるように、カリキュラムの一つになっているように感じます。そんな教職大学院で、これから2年間養護教諭としてのアイデンティティの確立という筋から今までの自分を深く見つめ、今より広い視野に立って実践を考えていきたいと思えます。そうすることで、これからの私の職務に対する姿勢や実践が変わっていく予感がしてとても楽しみです。



Schedule

- 6/27 sat -28 sun** 実践研究福井ラウンドテーブル
- 7/11 sat** 合同カンファレンス (9:30-12:30)
- 7/21 tue -23 thu** 夏の集中講座 1a (9:30-17:00)
- 7/28 tue -30 thu** 夏の集中講座 1b (9:30-17:00)
- 8/2 sun - 3 mon** 教育のアクションリサーチ研究会 (熱海：東京大学主催 (任意参加))

- 8/3 mon -5 wed** 夏の集中講座 2a (9:30-17:00)
 - 8/6 thu - 8 sat** 夏の集中講座 2b (9:30-17:00)
 - 8/17 mon -19 wed** 夏の集中講座 3a (9:30-17:00)
 - 8/20 thu - 22 sat** 夏の集中講座 3b (9:30-17:00)
- 集中講座は1・2・3それぞれ ab どちらか選択 (abの組合せ自由)

【編集後記】 今回のラウンドテーブルの企画は教員主導ではなく、若い院生達の考えや力が十分に活用されました。全プロセスに参画したことによって院生たちは、1つの仕事の全体と部分の関連、コーディネート機能の実際を体験してくれたものと思います。とても頼もしい動きでした。2年目に入った教職大学院。今後の課題は少なくありませんが、1つずつ確実にものごとを吟味しながら、歩みを進めて行きたいものです。(AIB)

教職大学院 Newsletter **No.14**

2009.06.26 発行

2009.06.26 印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtfukui@yahoo.co.jp